

日蓮大聖人御書全集

みこしぶりごしよ

御輿振御書

新版
1652

みこしぶりごしよ
御輿振御書

ぶんえい ねん がつ にち さい さんみぼう
文永 6 年 ('69) 3 月 1 日 48 歳 三位房

おんふみ

みこしぶ

につき

た

そうら

よろこ

い

御文ならびに御輿振りの日記、給び候いぬ。悦び入つ

そうろう

て候。

ちゅうどうえんじよう

ぎそうろう

さんもんはめつ

ご

せつ

中堂炎上のこと、その義候か。山門破滅の期、その節

そうろう

ゆえな

てんじく

に候か。これらも、その故無きにあらず。天竺には

ぎおんしやうじや

けいずまじ

かんど

てんだんさん

しやうぞうにせんねん

うち

祇園精舎・鶏頭摩寺、漢土には天台山、正像二千年の内に

めつじん

いま

まつぼう

あ

にほんこく

えいざんあ

もつて滅尽せり。今、末法に当たつて日本国ばかりに叡山有

さんぜんかい

なか

ところ

あ

さだ

あくま

り。三千界の中にただこの処のみ有るか。定めて、悪魔、

いつせき そね

とど

しょうじょう

ごんきよう

やから

ねた

一跡に嫉みを留むるか。小乗・權教の輩もこれを妬む

ぜんそう

りつそう

ねんぶつしや

おうしん

うった

か。したがって、禪僧・律僧・念仏者、王臣にこれを訴う。

さんぜんにん

だいしゆ

わ

やまはめつ

こんげん

し

しだんとも

三千人の大衆は我が山破滅の根源とも知らず、師檀共に

はこく

はぶつ

いんねん

まよ

破国・破仏の因縁に迷えり。

たの

みようほうれんげきようだいしち

まき

のち

ごひやくさい

ただ恃むところは、妙法蓮華經第七の卷の「後の五百歳、

えんぶだい

こうせんるふ

もん

でんぎようだいし

しょうぞう

閻浮提に広宣流布せん」の文か。また伝教大師の「正像や

す お

まつぼう

ちか

あ

ほつけいちじよう

き

や過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り。法華一乗の機、

いままさ

とき

しやく

めつ

しよう

今正しくこれその時なり」の釈なり。滅するは生ぜんが

くだ のぼ

さんもんはんじよう

ため、下るは登らんがためなり。山門繁昌のために、かく

のごとき留難るなんを起おこすか。事々ことごと、紙上しじように尽つくし難がたし。早々そうそう

見参げんさんを期ごす。謹言きんげん。

さんがつついたち

三月一日

ごへんじ

御返事

にちれん

日蓮

かおう

花押